

肺塞栓症研究会 会員の皆さま

代表世話人からのメッセージ

肺塞栓症は、わが国においては従来から極めて稀な疾患とされてきましたが、生活習慣の欧米化、診断機器の進歩、本疾患に対する認識の高まりなどにより、わが国における肺塞栓症の頻度は確実に増加しており、この事実は肺塞栓症研究会の行った全国調査でも明らかになっています。このような中で、肺塞栓症研究会と日本血栓止血学会が中心となって他の 8 つの学会と共に作成した静脈血栓塞栓症予防ガイドラインが平成 14 年に公表され、さらには「肺血栓塞栓症予防管理料」が予防としてはじめて保険診療として認められたため、全国津々浦々まで本症に対する関心が一気に高まり、臨床の現場において肺塞栓症発症予防処置が講じられるようになりました。

また、平成 16 年に発生した新潟県中越地震をはじめ平成 23 年の東日本大震災、平成 28 年の熊本地震などにおいて震災被災者に肺塞栓症、いわゆるエコノミークラス症候群が発症し、大きな社会問題となりました。こうした中、災害避難時の予防対策を積極的に啓発し、被災現場には弾性ストッキングも提供し、エコノミークラス症候群予防対策に貢献してきました。近年では新型コロナウイルス感染症（COVID-19）における血栓塞栓症の実態調査を行い、その解析を基に予防指針を提言しており、これは厚労省の診療指針や 2025 年に刊行された日本循環器学会主導のガイドラインにも取り上げられています。このようにわが国の肺塞栓症に対する本研究会の貢献度は極めて大きいものですが、すでに十分なエビデンスの創出と臨床現場における役割は果たしたものと思われれます。

本研究会は平成 6 年に発足しましたが、第 33 回を迎える令和 8 年をもって発展的解散を決意するところとなりました。若手の先生方はもちろんですが、今まで本研究会の発展にご尽力されてきました多くの先生方には是非最後の開催となる第 33 回肺塞栓症研究会へのご参加をお願いする次第です。

第 33 回肺塞栓症研究会は、従来的一般演題、3 つの要望演題、ランチョンセミナー、スポンサードシンポジウムの他に特別企画として「肺塞栓症研究会がこれまでに果たしてきた役割と歴史を振り返る」を設け、さらに研究会終了後には懇親会も開催することにしましたので、奮ってご参加およびご発表の程宜しくお願い申し上げます。

2026 年 7 月 30 日

肺塞栓症研究会

代表世話人 小林隆夫

